隠岐の水産經濟の分析

島嶼社會の經濟的構造と解體（その3）

田 中 豊 治

1. 上代に於ける隠岐の水産物 延喜式主計上には隠岐國の調、及び中男作物を次の如く列擧している。「御取鰻^{みとりのおわび}、短鰻、烏賊、煎海鼠^{いり}、鮓腊、雜腊、紫菜、海菜、嶋蒜」が之で、貢納量は鑄方教授の計算では、御取鰻 620 斤、短鰻 930 斤、烏賊 1550 斤、煎海鼠 1336 斤、鮓腊 620 斤、雜腊 4030 斤、紫菜 2480 斤、海菜 5163 斤、嶋蒜 11160 斤となる⁽¹⁾。貢納品の種目中水産物のしめる品目は若狭、志摩の2國に次いで隠岐は第3位を占める。更に貢納量は一般的には比較が困難であるが出雲、石見の近邊諸國には遙かにまさっている。かゝる水産物の生産卓越に對し、その他の生産を貢納品から比較すると誠に僅で上代に於ける隠岐の生産活動の中心は水産業にあつたことが豫想せられる。中世に於いては民政に關する資料が見當らないので水産經濟は勿論その他の經濟狀態については全く不明である。

2. 近世封建社會に於ける隠岐水産業 徳川時代の地先漁業は地先漁業權を採つた村の共有になつていたので、課税の對象が村あてになり、自然漁業權が村に歸し、之が近代まで持ちこされている場合が多い。隠岐では全く部落別の漁區が徳川時代のそれと同一であつた。之を「場區」と稱して居る。場區に於ける漁獲に對しては小物成として村方に課税がせられ、之は郷帳に明瞭に記されている。此の郷帳に記述されている水産關係の小物成は寛政7年には第1表の如くである。いずれも沿岸漁業である。その漁法に於いては「大敷、四ツ張りその他介藻等の磯物は各自村内に於いて營業をなし、自他入會を許さず、鰯、鰯、延縄にいたつては一國これを共有す⁽²⁾」と云う狀況であつた。出雲杵築の漁夫に限り天保の頃より島前の崎、大井、知々井に入漁が許可され、更に安政五年には西郷、今津、岸濱、賀茂、箕浦、嶋木の島後の村々に入漁が行われてきた。しかしこれらは鰯、鰯漁についてであつて磯物の採取は許されなかつた。當時の隠岐の水産物中如何なるものが主要なものであつたか、郷帳に依つてこれを見ると串鰯

地理學評論 24 卷 6 號 1951 年 6 月 * 神奈川縣立吉田島高等學校

(1) 鑄方貞亮：隠岐國上代の水産業 經濟史研究 36 卷 3 號

(2) 隠岐支廳 舊幕時代隠岐國漁業慣行調査書 明治 25 年

第1表 寛政7年の水産關係小物成

197

		山 手 鹽	串 鮑	干 海 鼠	和 布	海 苔	鰯 連	鰯 本	大 鯛 枚	小 鯛 枚	鯖 刺	鰯 俵	飛 魚 俵
那	久	俵 200	枚 40	枚 20	束 6	升							
都	萬	273											
油	井	100											
南	方	130	32	20	6	6		3		80			
北	方	100			3	18	20				20		
	代	100			20								
久	見	100	60	20	6		72			100			
伊	後	60				18							
西	村			20		10							
中	村			20	10	12							
元	屋		10	10		6							
飯	美	30	20	10	6								
布	旋	80	30	20			60						
卯	敷	60	20	10									
大	久	120		12	10	12	180						
犬	來					30							
鰯	木		40	30	2	13	11	13			38		
箕	浦				2	9	8	9			27		
岸	濱			12	1		2	3			10		
今	津		20	20	3		3						
下	西				4	20					20		
海	士		36	44		12		14	14				
宇	賀		40					1					
受	田		20	20	2	10		20	10				
豐	井		6	20	4			5	10				
知	々		10	6	2		10	3					
太	井		20	10		2		4	4				
布	旋		14		3	5	80	9	8				
	崎		20	14		7			7				
福	井		20	20	5	10			5				
知	里				10				75			75	57
浦	郷				5	5	6		6			50	150
美	田	120				8			7				2
別	府		16	16									2
宇	賀		16	16	2								2

米4石7斗4升6合，山手鹽1597匁9分，串海鼠米9斗5升4合，鰯109匁2分，鰯95匁4分，鰯212匁5分である。小物成としては山手鹽が貢納上は多額をしめていることがわかる。鮑，なまこ，鰯は注目を要する。延喜式の記録に於いても此三者は調として隠岐の貢納品の代表的位置を占めていたが徳川時代に於いては徳川幕府の官營事業の一として對支輸出物としての一役を買っている。鰯，飛魚は煮干にして京阪に輸出された。鰯は鹽物にし，正月用品として上方に輸出した。隠岐島誌には「隠岐島は夙に水産業開け，徳川氏の頃より海産物を清國に輸出するの途開け，享保年間より明治維新まで島内に座方なるものを設け，製造者の取締をなし精製品を輸出して頗る名聲を博す云々」と記事のある所以である。つまり水産品の商品化と云うものは幕府の對支貿易の對稱となつたため比較的早くから行われたのである。

3. 隠岐に於ける長崎俵物の生産⁽³⁾ 鎖國時代の日本の貿易は主として清國を對照として行われていたのは衆知の事實であるがその貿易品は輸出品としては銅及び海産物が主で海産物では昆布，煎海鼠，干鮑，鰯，鰹節が主であつた。此のうち煎海鼠と干鮑は鰯や昆布と異り俵に入れて出荷したので「俵物」と呼ばれる。長崎俵物とは長崎から輸出せられた故に斯く云うのである。隠岐では鰯と俵物の3種が對支輸出品として幕府から割當生産を命ぜられた。此の間の事情については幸に「長崎俵物一途⁽⁴⁾」並に「舊藩時代隠岐國漁業慣行調査⁽⁵⁾」の2資料が現存しているのでかなり詳細にその事情を知ることができる。俵物の輸出が始つたのは元祿12年であるが何時隠岐が俵物生産地にして幕府の統制に入つたか不明である。唯文化4年の島後代官より大庄屋に宛てた文書に「前略……兩島俵物の儀につき御糺有之……享和元酉年以來之御取極高1萬2000斤之所，年々出方減少仕候……」とあるのをみると，若しこれが最初の取きめなら元祿12年を下ること102年ののちの事である。文化，文政の時代には増産監督のため長崎俵物會所よりしばしば役人が出張し，追加供出を強要し，又補助金等の増額などを行つている。

幕末に及んでは幕府は平戸，長崎より潜水人夫をつれて來て，更に増産を計畫實施している。村方に對しては「萬一右斤數高致減少候はば權九郎

(3) 拙稿 隠岐に於ける長崎俵物の生産 經濟史研究 28卷

(4) 横地文書

(5) 隠岐支廳文書

殿、長崎代官高木作左衛門殿又々御渡海有之諸事御吟味」と厳令している。集荷、運搬等は宇屋村の板屋武右衛門、別府村の公文伴右衛門がそれぞれ擔當し長崎會所に納品している⁽⁶⁾。之等の俵物及鯛の貿易品化は隠岐の水産業を急速に貨幣經濟化して行つたのである。舊藩時漁制調査⁽⁷⁾に依ると「水産製造物を賣却するに當り、各村共、問屋を経るを要す。而して手数料として價格の百分の三を漁業者より納付せしむ、之を濱役と稱す。濱役は庄屋の特權なり」とある。庄屋の譲り記文にはこの特權が記入されている。之に依つて見ると所謂商品經濟の侵入は直に封建的特權と結び商業資本の發達となつてゐることがわかる。濱役は問屋資本に生長し、更にそれは漁民の支配形態を強化していく、島後では「濱借り」島前では「入り銀」と稱するのは問屋が漁業者に貨幣の前貸する制度で、漁獲物を問屋の言値で納めると云う商業資本の生産者統制を生ぜしめた⁽⁸⁾。此所に一般漁民の大資本への屈從が表れ、他方漁業のマニユ化も行われる事となつた。

このマニユ化の最も典型的な形態は四つ張網の發達、延縄漁業の發達、潜水漁業の發達等に表れ、幕末には入稼漁業の發達まで行われている。四つ張漁業は全く資本主義的經營で一組 24 人の漁師をもつて一隊とする 7 隻～8 隻の網漁で網主の投資と網子の勞力提供に依つて成立する。漁區は「然れども網敷場の如きは全く數個の人の専用にして自村内の者と雖も株を所有せざる以上は漁權なし⁽⁹⁾」となつた。延縄が潜釣や一本釣を壓迫した事は零細漁民の悲痛な叫びとなつて文化 9 年己 10 月の奉願口上之覺に記されている。潜水漁業者は五島、平戸、長崎から招かれて來島し、問屋の下で稼業している。入稼漁業は出雲方面の漁民に依つて幕末盛に行われた。御役所の取締や制限があつたけれど殆ど効力なく貧弱な村落に於いて「出雲國大芦浦の海士漁民 30 年以前より年々漁場に侵入し磯物を窃取し、就中石菜花は残らず採取する事あり⁽¹⁰⁾」と言う狀況であつた。問屋は同時に航海業も兼營していたので、當時に於ける商業資本の發達は隠岐に於いては極めて獨占的な段階にまで達し、漁民の經濟生活のすべては問屋資本の支配下にあり、その故にこそ零細漁民の問屋への身分的隸屬が餘儀なくせられ、濱名子制度を中心とする漁村の封建的關係を持続せしめることとなつたのである。

4. 資本主義の發達と水産形態の變化 明治 35 年以降は水産統計が完

(6) 前掲 (3)

(7)(8)(9)(10) 隠岐支廳文書

第 2 表

順位	明治33年	大正2年	大正14年	昭和6年	昭和11年	昭和19年
	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓
1	鰯 1582	鰯 1168	鰯 1765	鰯 649	鰯 529	鰯 974
2	鯛 108	鯛 122	鯛 1179	鯛 604	鯛 521	鯛 864
3	鰯 85	鰯 74	鰯 349	鰯 375	鰯 448	鰯 539
4	鰯 52	鰯 72	鰯 287	鰯 316	鰯 407	鰯 446
5	鰯 51	鰯 49	鰯 155	鰯 263	鰯 298	鰯 329

備しているのに之に依つて先ず水産物を中心として漁業の變化をしらべてみると第2表のようになる。此の表をみると次の如き特性が指摘出来るであらう。(1), 鰯は大正14年まで絶對優位を占めている。(2), 大正2年までは鰯が5位以内にゐた。(3), 昭和9年以來鰯魚が主位をしめて來た。鰯が突然姿を消した。之は漁獲の對稱がそのように變化したために起つたのであらう。全く社會的條件の變化に依つて生じたのである。徳川時代の鰯、俵物を中心とした漁業形態が鰯魚の價値の相對的向上に依つて鰯、鰯魚にとつて代られたのである。明治初年は此の過渡期である。俵物貿易の官業からの解放と國內市場の開發に依る鰯魚、鹽藏魚の需要の増加等が特に表れて來る。明治20年、島前、島後の漁に就いて次の如き申合せがなされた。(1). 潜水器の使用禁止、(2), 鰯延繩の禁止、(3), 7月~12月間の採藻禁止、(4), 海苔取りに機械使用並に撒灰の禁止、(5), 水中集魚燈の使用禁止が之である。

明治9年に宇賀村の宇野藤十は鰯潜水漁業を起し、知夫、別府の操業權を得、更に逐次島前全域の潜水漁權を得、殆ど對支貿易品の鰯採取の利を獨占した。20年の禁止策は此の大企業に對する零細漁民の反對である。しかし24年に至つて、深さ11尋以深の潜水權は再び宇野の獨占する所となつた。島後では五島福江の御手洗時太郎が飯美、久見、伊後等で潜水採鰯權を得ている。鰯延繩の禁止は徳川時代既に禁止されていたが明治8年頃より再び西郷の漁業家が大規模な稼業に出て殆ど沿岸の鰯漁を獨占し、零細な漁民の生活圏がおびやかされた。採藻、採海苔、水中集魚燈の禁止も敍上と性格は等しく、水產品の市場の擴大と商品化のため急激に資本主義的經營に隱岐漁業が轉化せんとした結果起つたことで、新舊漁法の交替期の一現象とみられる。四つ張網は明治に入つて急激に發達し、網敷場の數が現状と同様に決定したのは明治14年である。西郷の例では13にわ

第1圖 西郷の四つ張漁場

り、外部の大資本の侵入が逐次行われる様になった。地元資本の合同に依る會社經營の漁業は明治 14 年に於ける海産會社をもつて最初とする。宇賀、海士、別府、美田、知夫に於ける採鮑の獨占、鯖、鰹、鰯の鹽物の製造、移出をその業とした。從來の俵物及鰯は貿易品として出荷した。隠岐で尾吼鰯を「貿易」と呼稱しているのは明治期對支貿易品として鰯が代表的であつたからである。大正の末期より昭和にかけて冷凍設備の完備は鮮魚の價值を躍進せしめ、此所に近代的漁業の展開をみるに至つた。巾着網は明治28年に、鰹漁は34年に始められた。いずれも地元資本に依るものであつたが之は間もなく資金不足に依つてつぶれた。然しながら之は地元資本に依る企業的經營の失敗であつて、外部資本の漁場侵略は昭和年代に入つては決定的となつた。第2圖はその狀況を示したものである。即ち島前の大部分と島後の主要漁場が蠶食されている。地元資本の畜積の貧困がかかる成果を招待したのである。巾着あみ、網、四つ張或は潜水漁業等が主で、長崎、山口、兵庫、底曳京都の漁業會社がこれを經營する。

漁獲物は隠岐には水揚げにならず、下關、加佐、賀露等に直送される。従つて隠岐自體の漁業はかゝる大資本下にとりのこされている零細漁業に他ならないのである。第2表は此の狀況を示す。95%まで零細經營である。従つて漁業に依つて獨立した生計を維持する事は隠岐の漁民にとつては困難であり專業者が非常に少い。1948年の統計では隠岐全世帯 9182 のうち、漁業

たる網場が殆どその沿岸地區を所せまきまで利用し、しかもその網場使用については株持ち 13 家その漁場を獨占し、收穫の平均化をはかるため輪轉制をとるまでに至っている。

かくの如く明治初期からは漁業は急激に資本主義經營に移つて行つた。明治7年大政官布で専用漁場の制がとかれてからは因幡、伯耆、出雲、石見からの入漁が盛になり、外部の大資本の侵入が逐次行われる様

第2圖 年の漁場佐用區分

戸数 2442 で専業は僅に 147 戸、しかもそのうち 119 戸は西郷で之に次ぐものは浦郷の 7 戸である。1 兼 513, 2 兼 1782 である。2 兼が絶対に多い。これより見て漁民の生計が如何に不安定であり、大部分の漁業者は漁業に依つて生計が維持され得ないことを示している。島根縣水産統計では生産總額からのみ見た場合に隠岐漁區が島根縣全體の 40% たる 4280221 貫の生産をあげ、漁區としては極めてすぐれて居る事を示し、之は大資本の侵入を考慮してみた場合誠に皮肉である。かくて隠岐の島民の經濟と直接結びついているのは入會漁業たる烏賊漁業と沿岸の魚介採取に過ぎない。

第 3 表 (22.8.1 センサスより作製)

町村別		知夫	浦郷	黒木	海士	五箇	都萬	磯中	布旋	東郷	西郷	計	
種別													
漁業種類別	定置漁業		4	1	1							6	
	揚繰網漁業			3						2		5	
	敷網類漁業	3	3		7			1			12	26	
	汽船底曳網漁業										9	9	
	其の他底曳網漁業	16	35		5			1	2			59	
	流刺網漁業	3	13		1	1						18	
	其の他の海面漁業	218	154	216	521	92	282	248	90	90	154	2305	
内水面漁業		5		3			5				13		
浅海漁業				1							1		
	計	240	214	220	539	93	282	255	90	92	147	270	2442
經營型態別	世帯經營	240	194	218	485	93	282	253	90	92	147	212	2306
	網元經營	0	8	2	5	0	0	0	0	0	0	55	70
	共同經營	0	12	0	49	0	0	2	0	0	0	3	66

企業的經營は僅か西郷の網主が之に参加するに止る。従つて烏賊の回遊の有無は直に漁民の經濟生活を左右し、不安定な狀況から抜け出すことができない。明治 20 年以降の烏賊の漁獲高は第 3 圖の様で昭和期の不振が特に注目を要する。牧畑の崩壊に依る農業の疲弊、漁業に加え

第 3 圖 烏賊の漁獲高度化

られた大資本の漁場獨占に依る地元漁業の零細化と、それに伴う漁村の崩壊は隠岐の經濟機構を全くミゼラブルにしてしまつた。島嶼の經濟更生を單に局所的に解決しようとして町村單位の更生計畫が實施されて居るが、之が實績をあげ得ない原因は全く現象分析の視野の狭さからきて居るものであり、問題所在の解釋の的はずれの故である。世界經濟の機構を除外視して地域經濟はあり得ない。隠岐の如き日本海に於いて秀れた漁場は廣域經濟の機構の下に於いてその意義を發揮するのが望ましく、此所に地域開發の綜合的國家計畫の實施が望ましく、かゝる計畫に従つてこそ、社會的に未開發な地域の開發は新しい脚光をあびてその生命を發揮し得ると思う。隠岐水産加工業の不振なども全く零細漁業の故に立地し得ないのであり資本蓄積の貧困が工業化を妨げているのである。地域計畫の合理化と社會化の早急の實施が現在の日本に於いては重要視せられる所以である。

(昭和25年3月4日受理)

Disintegration of Oki Fishery Industry.

—The Economic Structure and Its

Disintegration of Island Community. (3rd Rep.)—

Toyaji Tanaka*

The Oki Islands, or the Province of Oki, as described in “Engishiki” a court document of the 11th century, was noted for her fishery products.

In the amount of the products, according to the above document, Oki ranked third, the other two being Wakasa and Shima. Dried sea-ears, boiled sea-cucumber and dried cuttle-fish were the principal products. At dawn of feudal times these were produced for export to China, the fishing, manufacturing and delivery being under strict supervision of the Tokugawas.

The above fact helped to turn the fishing industry of the Islands towards commodity economy at an early period. Near the close of feudalism, commercial capital grew steadily in the islands, and the manufacture type of fisheries was established to be followed by the disintegration and impoverishment of the fisherfolk. This tendency was further intensified by the growing capitalism, which caused big extraneous capital to flow into the province, replacing small capital there. Most of the fishing grounds were monopolized and the fisherfolk were still more impoverished, and they have had no other resources to take than a small scaled fishing of cuttle-fish for a side-line.

It is to be regretted that the Oki Islands, with all her natural resources, are unable to make the most of them in the interest of local welfare and prosperity. The future of the local economy has many problems to be carefully dealt with.

* Yoshidajima upper secondly school, Kanagawa prefecture.